

ゴースト  
の華麗なる  
転身

短編



山中與隆

YAMANAKA TOMOTAKA

Duo-Yamanka

ゴーシュ  
の  
華麗なる転身

---

山中與隆

## 目次

ゴ―シユの華麗なる転身

1

編者あとがき

46

# ゴーシユの華麗なる轉身

作 山中與隆

私は今日も無断で学校を休んだ。おととい体の具合が悪いと連絡して休んだが、その翌々日のことだからまだ快復していないと判断してくれるだろう。

だが病院に行っていないし薬を飲んだわけでもない。ただひどく体がだるくて疲労感が強い。

学校では教頭か誰か空きの先生が私の学級を見てくれているだろう。私はよく休む教師だから同僚たちは、

「またか」

と思うだけで淡々と対処してくれていると思う。

私のクラスはいわゆる学級崩壊状態で、子供たちと学級担任の私との間に信頼関係はなくなっている。子供たちは徒党を組んで私に反発してくる。私は懸命に教材研究をして授業に臨むが、その授業は子供たちの心を捉えない。授業中の騒がしさで、隣の先生が叱りに来たことさえある。子供たちは一応掃除当番をするが指導は行き届かず、私が一緒に指導しながらしても、

「先生がするからいいや」

とばかり適当に切り上げて帰ってしまふ。教室が汚い、まるで豚小屋だといって父兄から学校に苦情が来たこともある。私は子供たちが帰った後、一人で掃除をやり直すことがよくある。そんなとき手伝ってくれる女の子がいた。勉強も出来て、授業も一生懸命聞こうとしてくれる子だ。一度その子の親からも、

「子供が、授業中騒がしくて授業が聞き取りにくいから何とかしてほしい」と言われたことがある。私の掃除を手伝ったことが他の子に知れて、その子は苛められ、手伝うことはなくなつた。

突然ようすを見に来た教頭は、ふとんから出ずにいる私の枕元で、



「先生のクラスは、先生のお休みが多いので授業が遅れていて、父兄からも心配する声が学校にきているのです」

と言った。そして、

「続けて出勤するのが難しいような健康状態だったから、休職して病気をしっかり治してから復帰する」という方法もありますから」

と暗に態度をはつきりしてほしいという言い方をし

た。そうすれば病休代理の教諭を手当てすることができると言うことであつた。私は、そろそろ限界かと思つた。しかし不思議と授業をほつたらかしにしている子供たちに対して罪悪感のようなものは湧いてこなかつた。ただ、自分が教師としてやるべきことを何も出来ていないという慢性的なストレスが体全体に充満して、私の体も頭の中も鉛のように重たくしていた。それがこの得体の知れない倦怠感の原

因であることはわかっていた。

午後になつて、腹が減つて起き出した私は、急に思いついてある男に携帯から電話をした。自分のこれからの人生にとって非常に重要な電話であると言ふ確信のよ様なものがあつた。

「ああ、お話は聞きますよ」

比較的愛想のいい、大きな声の返事が返つてきた。

その相手というのは、たまたま立ち話をしたことがある人物で、旅まわりの劇団に関係している男である。その劇団の事務所は私の家のすぐ近くにある。『自由劇場』という看板が出ている。私はずいぶん以前に、その看板に書いてある電話番号をメモしてあった。なぜメモしたのかは覚えていない。何らかの興味があつたのだらう。

自由劇場は、何ヶ月か旅回りをして帰ってくると、

しばらく滞在して次の旅の準備をするようである。

通りに面した土間の部屋があり、そこを劇団の事務所にしている、その奥に男と家族が住んでいるようだ。そこには劇団員らしい人たちがときどき集まって相談しているのを見かけたことがあるが、そこで練習などしているのを見たことはない。また舞台道具などもほとんど置いてないから、別のところに倉庫でも借りているのかもしれない。そう言えば車

体に大きく『自由劇場』と書いた四トントラックが事務所の前に横付けしているのを見たことがある。舞台道具一式はあれに乗せてあるのかもしれない。男は電話の向こうで大きな声で言った。

「ちようどいま人が必要だったので、一度いらしてください」  
と言った。

私は、入団できないかいきなり電話したのだった。

まったくの素人だが私でも出来そうかなどを聞いた。私は電話をしながら男の事務所に向かつて歩いていった。そしてまもなく電話している男の目の前に立つた私は、

「こんにちは」

と声をかけた。男は電話の相手がいきなり目の前に現れたので少し驚いたようだが、すぐに笑いながら、「おお、あなたでしたか。私が劇団を主宰している

沢です」

とおおらかな調子で言った。そこで私たちは笑いながら電話を切った。

「でも学校の先生でしたよね。今日はお休みなんですか？」

私が近くの小学校の教諭であることを知っているのだ。以前立ち話のときに、私が言ったのだろう。「二、三日前から具合が悪くて休んでいるのです。」



実はもしお宅にお世話になることが出来たら先生の方は辞めたいと思つてゐるんです」

「もともと私には小学校の先生なんか向いてないと思つてゐるんです。嫌でしょうがないから体調も悪くなるし、どうせなら毎日楽しく生きていきたいですからね」

「芝居がお好きならいいですが、これも結構いろいろあつて、決して楽しいばかりじゃないですよ。そ

れに収入なんて先生の何分の一しかないと思いますよ」

「ええ、その辺は想像しています」

「いつからですか」

「きょうからです」

「そんなに急に、いいんですか。もう学校には話してあるんですか」

「いや、まだです」

「それ、いったいなんですか。いいんですか？」

私は男と話しながら、旅まわりの劇団の生活に入りこんだ自分を想像していた。

「いや、先生がそれでいいとおっしゃるのなら、私の方は人手がほしいと思っていたところなので、構いませんがね」

男は私の顔を見ながら、本当に大丈夫かという表

情をしている。

「実は、今日の三時に次の旅に出発することになっているんですよ。今度は二カ月後に帰ってきますから、そのときに結論を出しましょうか。私の方は先生が本気で、学校の方の手続きなどもオーケーとなつたら、喜んで仲間に入ってもらいますよ」と言いながら、旅の予定表を見せてくれた。『北陸公演スケジュール』とあり、確かに出発日、六月二十

日十五時、集合場所、白山市××旅館となっている。私はほとんど見境もなく、

「今日の三時、同行します」と言ってしまった。

「え、学校は」

男は驚いて聞き返した。

「これから、連絡します。もともと学校としては休みの多い私に、早く辞めてほしかったはずですから、

喜びますよ」

そう言いながらも私は、教頭に電話して突然辞めることをどのようにか、それで辞任が認められるのか、頭の中で思い巡らしていた。そして同時にチェロのことを思い出した。

「実は私、チェロをちよつとやっているのですが、先に持って行ってもいいですかね」  
ときいた。

「そうですか。いや楽器を担いでお出かけするところを見たことがありますか、そうですね。勿論かまいませんよ。時には芝居で役に立つかもしれませんしね。そうだ使えそうですね。いまここに持ってきて聞かせてもらえませんか」

男は、何かを思いついたように私に言った。私はすぐに家に帰って楽器を持って事務所に戻ってきた。男の前で楽器をケースから取り出すと飴色に輝くチ

エロが姿を現した。自分自身その美しい姿を見て、こんなよれよれの自分には似合わない美しさだと思つた。男も、

「綺麗なものですね」

とまじまじと見ている。私は弓の毛を張ると、空いている事務椅子に腰掛けてバツハの『無伴奏チェロ組曲第一番』のプレリユードを弾き始めた。最初の数小節のところ次を忘れたので弾くのを止めた。



「いや、下手くそなアマチュアですがね、私にとつてはチェロを弾くことは大切な生活の一部なんですよ。だから何処にいても一日に一回はこつそりとでもこの楽器に触りたいんです。いいですかね」

「もちろんいいです。それよりも私は出し物のアイデアが出来ましたよ。『ゼロ弾きのゴーシユ』です。宮沢賢治ね。あなたの役者デビューはゴーシユで決まりですね。よし決まった。じゃ、先生もすぐに学

校など必要なことをしてください。あとはそのチェロと着替えなどを持って今日の三時にここに来てください。私はここからトラックを運転して行きますから、助手席に同乗してもらいます。助手席にもう一人、家内が乗りますので狭いですが我慢してください」

「他の皆さんは？」

「皆さんと言っても、スタッフ兼役者が三人いるだ

けです。彼らは現地集合です。住んでるところがま  
ちまちですから」

そこまで言ったとき、男は大切なことをいい忘れて  
いたというように、

「ご家族は？」

と聞いた。私は、十年以上前に離婚してから家族は  
なくずっと一人で暮らしていることを言った。男は、  
それなら大丈夫だと思ったようで、

「では、のちほど」

と言つて、立ち上がりながら私を送り出した。

「わかりました。すぐに準備してきます」

そう言つてひとまず私は事務所を出た。

そうは言つても、今すぐに学校を辞めるなどということをどうやって伝えるか迷つた。やはり直接学校に出向いて校長に言うべきだろうと思つた。しかし、いま学校は授業時間中だ。他の先生方も学級の

子供たちもいるところに病気で休んでいる者がこのこ出て行きにくい。できれば電話で済ましてしまいたい。私は、電話でいふべき言葉を頭の中で思い巡らせた。しかし、いくらなんでも今すぐやめると言うのは、本人が交通事故か何かで死んだような時にしかありえないような気がしてきた。

私は、もう一度自由劇場の事務所に行った。今まで気がつかなかったが、看板の下のほうに『劇団長

沢 和彦』と書いてある。あの男は団長だということ  
とがわかった。事務所では、沢団長が電話していた。

私は彼の電話がすむのを待つてから、

「すみません、やはり次に旅から帰られたときから  
お世話になることにしたいと思うのですが。さつき、  
団長さんがそう言うてくださったのに、冷静になつ  
ていなかっただもので」

「なにか問題がありましたか」

「いや、学校もですが、それ以外にも連絡しておかなくてはならないところがあるし、持って行くものも三時までというのはちよつと・・・」

「そうでしょう。そうしたほうがいいですよ」  
沢団長は、私がそう言い出すのを予想していたかのように、あつさり認めた。

私は、意を決してその日の夕方学校に行った。子

供たちの下校後の時間を見計らったのだ。私は学校に着くと直接校長室に入った。幸いに他の先生たちと顔を合わさないですんだ。

校長は一応、

「具合はどうですか。顔色が良くないですね」と言った。顔色が良くないはずはないと思っただが、そういったてくれたのは都合が良かった。

「体調が思わしくなくて、いつも大変ご迷惑をおか



けしていません。それで実は、辞めて徹底的に体を治そうと思うんです」

「先生を辞めるということですか？辞めなくても、病休を使う手もありますかね」

校長は、一応そう言ったがその言葉にはあまり熱意が感じられない。

どうせこのいい加減な男が辞めてくれればちようどいいと思っっているに決まっている。私は、もう気持

ちは決まっていると言うように、

「ええ、でも辞めたいと思います。私のほうはいつでもかまいませんが、後任のこととか学校の都合もあるでしょうから、いつにしたらいいでしょうか？」

「そうですか。残念ですね。でもご自身の健康が第一ですから、あなたの良いようにしてください。学校のほうは何とかなりますから」

校長は、わが意を得たりとばかりに言った。私は、

用意していた、理由を『一身上の都合』とだけ書いた辞表を内ポケットから取り出して、校長の前に置いた。校長は一応丁寧な仕草で私の辞表を、ちよつと捧げるような仕草で手に取ると、すぐ後ろの執務机に置いた。そして、

「私物の片付けもあるでしょうから、明日の朝始業前に来て、一応先生方とクラスの子供たちに挨拶されませんか？」

と言った。私にとつてはあまりやりたくない儀式だったので、

「実は、明日朝から病院に予約を取つてあるので、今から私物の整理は済ませたいと思います。いまいらつしやる先生にだけご挨拶したいと思います」と、でたらめも含めて明朝の出勤を辞退した。校長は、残念ですねと言いながら、私の申し出を了承した。校長としても厄介者を少しでも早く追い払えた

ほうが、気分がいいはずである。こんな奴のために学校の朝の神聖な時間を使いたくないと思っっているに決まっっていると、私は想像した。

職員室には、三、四人の先生方がまだ仕事をしていた。私が入っていくと、具合はどうかと型どおりの挨拶をしてきた。私は、

「それが、調子が良くないので、本格的に調べてもらうことにしました。いま校長先生のところへ辞表

を出してきたところですよ」

と言うと、みんなが顔を上げて私のほうを見た。あまりの急な話に、さすがに驚いたのだらう。私が辞めることを残念がる人はいないと思うが、それでも急に辞めるほどの病気と言うのならどんな状態なのかと聞きたそうな顔を感じて、私は自分から説明した。そうしないと、どこも悪くないのにねほりはほり聞かれて、ありもしない病気の嘘を重ねることに

なる。私は、はつきりした自覚症状はないが体全体がだるく、医者も精密検査を勧めて、本格的な療養が必要かもしれないと言っていると説明した。校長に話したのよりも詳しい説明になった。それ以上の説明は誰も求めてこなかった。もしかしたら癌でも見つかって早期治療をするのかと思つたかもしれない。それならそれでいいと私は思つた。

学校の先生と言う、私にとってはどうしようもない重荷を下ろして、足取り軽く帰宅した。子供や父兄の機嫌を取りながら、結局は子供たちを学校が目指す通りの型にはめていこうとする作業に、自分はまったく向いていなかった。自分の心に素直な生き方がしたい。その点、演劇という世界でなら、思い切り自分を表現できる。これこそ私の理想の生き方だ。しかもそのスタートに、『ゼロ弾きのゴーシュ』



という、音楽にもかかわるテーマが私には与えられた。長年続けてきたチェロの演奏を通じて、私の音楽への傾倒も生かされるのだ。これ以上の幸運が考えられるだろうか。

私は、途中本屋によって『ゼロ弾きのゴーシュ』の本を買った。確か持っていたように思ったが、この際新しい本がいいと思った。

自由劇場が二ヶ月の公演旅行から帰ってくるまで

に、ゴーシユの研究をしておくことにした。まず物語を読んだ。何度も読んだことのあるよく知っている話だ。これを演劇でどのように演出するのだろうか。沢団長が脚本を書くのだろうか。旅回りの劇団となると、普通股旅物などをやって、あいだに歌謡ショーのようなものはさんだりするイメージしかわかない。

それはいいとして、私が役者として客に伝えるの

は、ゴーシユの生き方だろうか、またはそれを通して私自身の主張を伝えるのだろうか。音楽と自然について語るのだろうか。つまり宮沢賢治の考えを出すべきなのだろうか。あるいは、旅回りの娯楽演劇としてただ面白おかしく舞台が展開すればいいのか。その場合物語はそのための単なる題材に過ぎないのか。

曲がりなりにも私は役者を生業としていこうとし

ているのだ。自分がやることに対してはつきりとした考えを持たなくてはならない。

『セロ弾きのゴーシュ』の中で、ゴーシュはオーケストラの団員として、ベートーヴェンの『田園』交響曲を、あまり上手く出来なくて指揮者に注文をつけられながら弾く。またコンサートでは『インドの虎狩』という曲を弾くことになっている。私はそれがどんな曲なのか知らない。ほかに家でも練習する。

いろいろな動物がやってきて、ゴーシユとのやり取りがある。舞台では結構私の演奏の場面がありそう  
だ。これはやりがいがある仕事だ。子供の機嫌をと  
りながら適当に日を送るのとはわけがちがう。

それからしばらくの間、私はいやで仕方なかった  
仕事から解放されたことと、新しい仕事への期待で  
すこぶる気分が良かった。しかし、数日すると何と

なく、学校に行きたくないと思いつつながら、体も重く、頭も重いときと似たような感覚が体の中に広がり始めた。それが何日も続いたので、旅公演に出る前に健康診断をしておくことにした。今ならまだ教員の健康保険が使える。

簡単な健康診断のつもりだったが、科目が進むうちに本当に病気があるらしいことがわかってきた。ついに三日くらい入院して精密検査ということにな

ってしまった。

何となくだるいという自覚症状しかなかったのに、胃がんと診断された。それも手遅れ状態という。入院して治療が始まると、急に重病人のようになってきた。

私の新しい人生は一時の夢に終わったのかも知れないが、とにかく希望だけは持ち続けて治療に専念しよう。学校には、嘘をいわなかつたことになった

だけでも、まったく役に立てなかつた職場に対しては、せめてもの良心の呵責から逃れることができて良かつた。

(完)

\*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。



## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より



## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情



## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## ゴージュの華麗なる転身

---

2022年8月30日初版発行

著者:山中與隆

編集:山中伶子

表紙素材元:

[www.photo-ac.com](http://www.photo-ac.com)

タイトル:昔の教室

作者:Mignonさん

写真のID:844869

[www.silhouette-ac.com](http://www.silhouette-ac.com)

タイトル:チェロ

素材のID:109733

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---